風韻

第21号

（昭和五十六年度）

神戸大学風韻会

風　韻　第21号　目　次

◎ 六十年の思い出（その三）……師　匠　字治正夫……3

◎ 話　題……会　長　荒川祐吉……4

◎ 先　輩　登　場

○ 新　春　雑　感……旧　1　藤井　茂……6

○ 随　想……旧 14　小杉岩蔵……7

○ ふ　る　さ　と……新 13　段野治雄……9

○ 謡・仕舞を始めた頃……新 25　伏見正章……10

◎ 学　生　投　稿

○ 一年生のページ……12

○ 二年生のページ……17

○ 三年生のページ……21

○ 卒業にあたって

－四年生から－……23

◎ 誌　上　研　究

○ 能の沈黙について……B 29　反田雅之……24

◎ あしあと（昭和55年度活動報告）……27

◎ 第二回風韻会ＯＢ会報告……29

◎ 決　算　報　告……29

◎ 新　役　員　紹　介……30

◎ 幹事長になってしまった現在の心境…E 31　井関浩一……30

◎ 昭和56年度行事予定……31

◎ Ｏ　Ｂ　通　信……32

◎ 伝　言　板……33

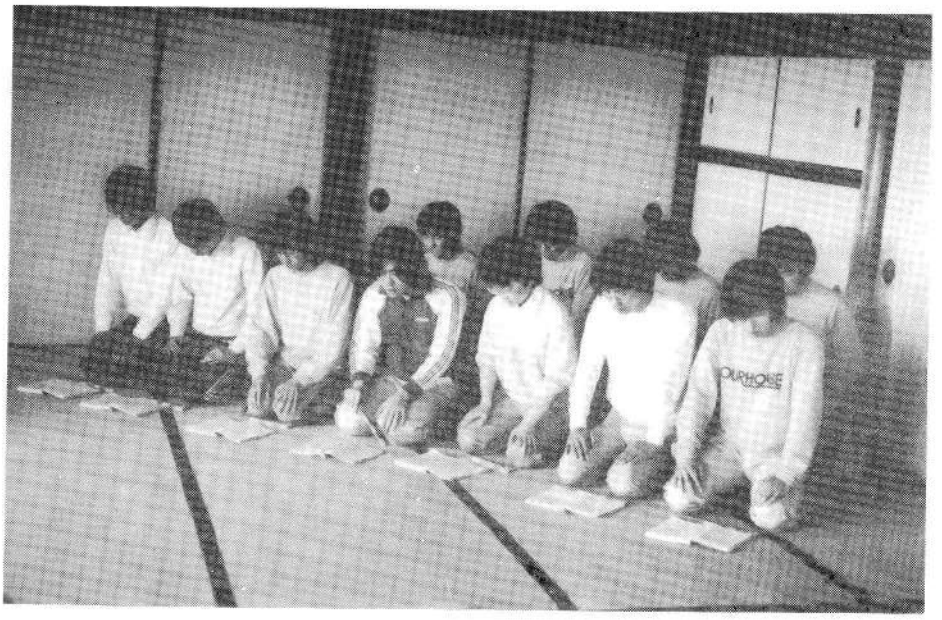
◎ 風　韻　名　簿……34

◎ 編　集　後　記……36

「通　小　町」

雨夜之傅

於　　大槻能楽堂



素　　謡

O B 会

六十年の思い出（その三）

師匠　宇治　正夫

謡の上手下手は、下腹に力が入っているかどうかによってきまるといってよいであろう。

声の抑揚、節の扱い、拍子当りなど、カタチの上ではあらゆる条件が、かなりの境地に達した人でも、下腹に本当に力が入っていないために、折角の謡がその値うちを失ってしまうことになる。

ところが、下腹に力を入れる、ということはなかなかむつかしく一朝一夕に出来るものではない。

いかにして本当に下腹に力を入れることが出来るか、ということであるが、先ず正しい姿勢で(親指だけを重ね合せ、ひざがしらを適当にひらき、背柱を真すぐにして顎をひく）腹式呼吸を繰返し発声することを反覆練習する。など、見聞したことで、自分の信じられるあらゆる方法を実行し、努力を続けてゆくうちに少しずつ効果があらわれてくるものである。

わたくしの体験をいえば、若い頃、人の通らぬ時間に摩耶山の奥の八丁の坂道を謡いながらかけ上り走り下りし、これを幾度も繰り返して心身を練磨し、ある時は役の行者の気持ちになって洞窟にこもって謡ってみたり、また、ある時は滝の音と声の力を競ったりもした。

また正座して天から落ちてくる清らかな水で全身が洗い清められるということを想定し、目をとじて両手を組合せ長時間経つと何ともいえない気持ちになり、これを一年も続けているとさとりというものに、近づいた感じになってきたものである。

要は方法のいかんより、先ず実行し、持続する、ということが大切なのである。

話題

会長　荒川祐吉

今回は、二つほど、話題を提供いたします。一つは、わが神戸大学風韻会にとっての大変おめでたいこと、いま一つは私自身の「世迷い言」です。却って読者のお目障りかと思いますが、これを以って責をふさぐこととさせていただきます。

藤井茂先生のこと

昨年「この一年」と題して、OB会の発足や、私自身のことなどとりとめもない一文を草してから、早一年経ちました。誠に早いものです。この一年の間に、風韻会関係で特筆すべきことは、神大風韻会創設以来、私がお引継をするまで、会長として、宇治先生と学生諸君との間にたち、又先輩との関連に常に心を配られて、現在のような、ユニークでかつすばらしい組織をつくられた、前会長藤井茂先生が、勲三等に叙せられ旭日中綬章をお受けになったことでしょう。

この祝賀のために、又第二回OB会を兼ねて、昨年八月二十四日神戸で開かれた会合には、先輩であり、かつ神戸大学名誉教授である米花稔、福光家慶両先生をはじめ、約二十名の先輩が集い、祝意を表すると共に、記念品を贈呈申し上げることができました。

藤井茂先生は、会長をご引退されてからも春秋の謡会には、御参加下さっているので現役学生諸君もお顔はよく存じておられるでしょうが、私が会長になってから、既にかなり年が経っており、直接どのような先生であるか御存じない向きもあろうかと思われるので簡単に御紹介をしておきましょう。先生は、神戸大学の原点、神戸高等商業学校が、大学に昇格し、神戸商業大学となったときの第一回の御卒業です。昭和七年御卒業と同時に助手として学究の途を歩みはじめられ、爾来、昭和四十七年定年退職されるまで、実に満四十年に渡って神戸商業大学、神戸大学の教官として、研究教育に携わってこられました。御専攻は国際経済学と貿易政策論です。この間学生部長、経済学部長を勤められ、又経済学博士（旧制）の学位も獲得されました。定年退官後は南山大学教授として、毎週泊りがけで名古屋までかけられ、南山大学経済学部の国際経済学、貿易政策関係の講義をされる傍ら、ゼミナールで学生の指導にも当られ今や神戸、南山両大学を通じ、先生の御指導を受けた者は七〇〇人に達しています。

先生は極めて多能多才であり、しかも温厚、良く人の言を聴き、人間関係の良好な維持には、特別の配慮を尽されます。その抱擁力ある温かいお人柄に惹かれて、先生のまわりにはいつも、温かな人々の交わりが出来て行くのです。文才にすぐれられていることは、この「風韻」への毎号の御寄稿を、例えば、小生の文と比較してみるだけでもお判りいただけると思います。

神戸大学風韻会は、このような立派な会長を戴いたお蔭で、今日の隆盛の基礎を与えられました。先生は、尚かくしゃくとして研究

に教育に、社会的奉仕に活動しておられます。これからも、幾久しくわれわれを御導き下さることを心から祈念するものであります。

腹

「腹に力を入れよ」「腹から声を出せ」、宇治先生から、上のような御教えを、或はお叱りを受けなかった人は、恐らく一人もおられないでしょう。「腹から声を出す」ことは、謡曲稽古の基本であり、むしろ大前提です。このことが出来ない限り、いかに咽喉から良い声が出せ、難かしい節を謡うことができても、それは所詮単なる真似事であって、謡曲とは云えないものであるといっても過言ではないでしょう。

然し、私についていうならば、稽古の不徹底もあって、未だにこの大前提を習得しきっているとはいい得ません。今までは、つい適当なところで妥協して、曲を習うことばかりに関心が向き、逆にこの大前提の重要さを自覚しない状態のまま過してきましたが、ここ数年先生の御召集によって重い習物の御稽古の一端に加わらせていただく様になってから、この　前提をさえ習得し得ていない未熟さを事毎に痛感させられる日々が続いています。

「腹から声を出す」ということは、口でいう程容易なことではありません。中々、自分の体でこれを自分のものにするのには、容易ならぬ工夫と努力が必要とされるように思われます。しかもこれは理屈ではありません。いくら生理学的な理屈を考えたとて、どうにもなるものではありません。日々の修練以外には体得の途はないのです。

謡について右のように云えることは、人生の他の局面についても同様にあてはまることでしょう。よく「あの人は腹のできた人だ」などといいますが、（この場合、腹とは書かず肝と書くことが普通です）そういわれる人は、人生の真髄をしっかり把握体得している人です。そしてそれはやはり日々の生活の中から、自分自身の修練に依って体得されていったものでしょう。

どうも「腹」は、こうみてくると、すべての基本のように思えてきます。頭で考え、論理だけで抽出してきたものは、あくまで「知識」であり「技術」であるにすぎません。腹で体得したものは単なる知識でなく、「知慧」であります。些か話が飛躍しますが、ここ三十年来の日本は、その最も基底的な、人間生活の大前提である、「知慧」をないがしろにし、「知識」と「技術」だけを追い求めてきたように思われます。いくら「知識」と「技術」が開発されたとて「知慧」に裏付けされなければ、これらは所詮あだ花であり、時には毒の花と化するのみです。「知慧」が生み出すものは「文化」であり「知識」「技術」が生み出すものは「文明」です。「知慧」に裏付けられない「知識」「技術」が生み出した「文明」は、しばしば「文化」を亡ぼすのです。

われわれは、未来に向って、「頭」と「文明」ではなく、「腹」と「文化」を求めて行かねばならぬのではないでしょうか。そしてこのことの重要さを、われわれは、幸いにも、謡曲の稽古という、いわば日常的（？）な常為の一端を通して、体得し理解し得るのです。

先輩登場

新春雑感

旧一回生　藤井　茂

一、

今年の正月は殊の外寒かったが、晴天に恵まれ、酉年の幕明けにふさわしい平隠さであった。家族に病人もなく、打揃って屠蘇を汲み、新年のスタートを祝した。去年のうちに用事を大方片付けておいたので、身も軽く心も爽やかで、まず、神歌、高砂、猩々を謡いさらに山姥を謡って、日本人であることの喜びを味わった。

元旦のテレビでは観世宗家の翁が、二日には金春流の桜間道雄師の羽衣が放映されており、二つともにじっくりと観賞することができた。謡に明けた新年が天下泰平、国土安全の年であるようにと祈ったことである。

二、

それにしても、世界の情勢にはきびしいものがある。イランの宗教革命につづくイラン・イラク戦争、ソ連のアフガニスタン進駐、ポーランド問題など多くの紛争や問題は未解決のまま本年に持越されており、経済面においても、アメリカ、ヨーロッパともに景気の回復ははかばかしくない。相次ぐ石油価格の引上げによって石油消費国の困難は深まり、天候異変による乾魃や冷害により世界の食糧事情も不安定である。この間にあって、日本は比較的好調を持続し政治の安定性と経済の弾力性が買われて円価が上昇気運にある。

しかし、好調といってもそれは他の国との比較においてであって石油問題一つをとってみても、日本経済の基盤は不安定であり、外国の不況は日本の輸出を抑えることになる。何より重要なことは、日本の地位が高まれば高まるほど、日本の政治や経済が世界の政治や経済の変動によって影響されることが多くなり、世界の政治や経済に対して、日本の果すべき役割や課題が重くなるということである。日本が国際化するというのはこのことである。

三、

国際化という場合、政治や経済の担い手は人であり、究極において日本人そのものの国際化が要請されることになる。確かに日本人の国際的な活動は活発化した。毎年海外渡航者の数は増加し、昨年アメリカだけでも百万人に達したという。世界の何処へ行っても日本の旅行客が見られる。一人でも多く世界各地を見聞し、外国から日本をふり返えってみることは国際化に役立つ。外国人の日本および日本を見る目も変わりつつあり、とくに外国人の場合には単なる観光を超えて、日本経済発展の謎を探るという意欲が強いようである。国内の日常生活や行動がこうした外国人の注目の対象になっていることを忘れてはならない。

日本人の国際化とは相手を知り自分を知るということである。相手を知るためには自分を知ることが先決問題である。逆に相手に知

ってもらうためには、日本人は日本を知っていなければならない。日本に根を生やし、しかも偏狭に日本だけにわだかまることなく、世界に眼を開いてこそ真の国際化が達成できるのである。

日本人が外国人からも尊敬と信頼をかちえるためには、日本人は日本の伝統や文化を知り、これを身につけていることが肝要である。東京の摩天桜に驚かぬ外国人も杉の木立に掩われた一宇のお寺の屋根の勾配に胸をうたれたという話を聞いたこともある。近代化した社会に生きさらにこれを推進するためには、摩天桜も必要であり、今後技術の進歩とともに生産面でも生活面でもつぎつぎと革新が進むことはむしろ当然であろう。大切なことは、そうなればなるほど日本人が日本人としての心の拠り所を大切にしなければならないということである。

四

日本の文化を代表するものの一つに能楽がある。その起源は六百余年の昔、室町時代に遡り、しかもこの長い年月にわたって殆んど原型を変えずに今日まで忠実に伝承されてきたことは驚嘆のほかはない。それには能楽が日本人の心情に通じるものをもっていたことが最大の理由であろうが、時流を超え、世相を凌いで心情に通じえたのは、それが永遠の美を求めて極度に凝縮された至高の芸術であるためであろう。そうである限り、能楽が時代を超えて日本人の心情に通じただけでなく、外国人の心情をも促えうるに違いない。能はもとより謡についてきびしい掟があり、不断の精進が求められるのは当然というべきである。

わたくしは宇治先生を師と仰いで四十九年、この頃になって漸く謡のきびしさがぼんやりわかりかけてきたように思う。そしてこれからもわたくしなりに精進を続け、この偉大な日本文化の精神の一端にふれたいと思っている。

（昭和五六年一月五日）

わたくしは昨年春に叙勲受章の栄に浴しましたが、OB会の皆様がわたくしのために心温まる祝賀の宴を催して下さり、さらに記念の品（夏の謡袴）を贈って下さいました。身に余る光栄と深く感謝しております。この誌上をかりて厚く御礼申し上げます。

随想

旧十四回生　小杉　岩蔵

私は、長い間静岡県におりまして、神戸へ伺う機会は少なく、宇治先生、藤井先生はじめ風韻会の各位にもご無沙汰をいたしておりますが、風韻会は、私にとって心の故郷で、その思い出は、今もなお鮮明に焼きついております。思いがけずも、幹事の方から寄稿の機会を与えられましたので、思いつくままに書かせていただきます。

最近の神戸大学の偉容を見るにつけ、戦前の旧制学部時代と比較して、今昔の感に耐えません。私達が学徒出陣第一号として角帽のまま営門をくぐったのは、昭和十八年ですから、星霜を経ること三十八年、この歳月の間に、日本は今やGNP一兆ドルの経済大国に成長し、わが神戸大学は六甲台一帯を圧する巨大なキャンパス群を

構成しています。私達がお世話になった学長、教授の諸先生の多くは物故者になられ、私達の同期の仲間でも数人が鬼籍に入ったにかかわらず、風韻会の師範は、宇治先生が依然としてご健在であり、会員学生諸君が稽古に励んでいる内容も、われわれの時代と同一であるということは、時の流れを超越して大いなる驚きであり、現役学生諸君とは親子ほどの年令差がありながら同時代の仲間との錯覚を感じます。宇治先生のご長命とご健勝を心からお祈り申し上げる次第です。

昭和四十六年、七年と五十一年に、風韻会の催しに参加し、現役諸君の元気な姿に接しました。端的に申しますと、謡や仕舞の芸については、よく稽古されており、その水準は昔の私達の頃より高いと思いましたが、次の新時代を背負って立つ若い人達の風格、霸気という点で物足りなさを感じました。私達の学生時代、関西五大学の大会には神大風韻会は素謡を無本でやる伝統があり、一生懸命覚えました。他の大学はほとんど見本党で、無本で出演することに誇りをもっていたものです。今になってみて、謡の記憶の程度を調べてみますと、学生時代に憶えたのは、今でも正確に残っているのに社会に出てからの謡会のために、三十代、四十代になってから憶えた曲は、忘れる一方で、その差の歴然としているのに呆れるばかりです。

私自身の経験ですが、学部十三回の前田一二氏とのコンビで、五大学大会に大蔵流狂言「膏薬練」を演じたことがありました。昭和十八年六月、大槻能楽堂でした。宇治先生にご紹介いただいて当時神戸におられた茂山（現善竹）忠一郎師のお宅で稽古を受け、本番の装束と後見は故弥五郎師のお世話になりました。私自身の動機はきわめて単純でして、能舞台に出るには、一度でよいから、あの幕をさーっと揚げて、橋掛りから舞台へ出ることをやってみたい・・・という夢を実現したのです。狂言の稽古をして、発生法が謡と違って、開放的な大声を出す、そのためにはヘソを上に向けるようにせよと教えられましたし、能・仕舞では左足から足拍子を踏むのに、狂言は右足中心であること、その他能と狂言との対照的な相違点がこの一曲の稽古である程度分りましたし、狂言を見る場合の貴重な資料となりました。

太平洋戦争の初期から中盤位までの時代でしたから、戦時中とはいえ、まだよき時代でした。それでも「蝉丸」は宮中を題材にしているので上演禁止、「勧進帳」の文章は一部修正され、靖国の英霊の奮戦を讃えた新曲「忠霊」の上演が軍の指示で奨励されていました。戦局は次第に憂色が加わり、東条内閣は学徒兵の出陣に踏みきり、私達は学業半ばにして戦いに駆り出されることになりました。十八年十一月、私達の壮途を祝して、楠寺を会場に壮行謡会が開かれ、あるいはこれが最後になるかも知れない謡会に、出征直前の悲壮な決意とお互いの武運長久祈願をこめて、声を限りに謡ったことでした。当時大学の先生方の中では、藤井先生、丹波先生、佐野先生および予科の生島先生が風韻会社中で、その壮行会にもご参加いただきました。丹波先生は経営学部長のとき、学園紛争のご心労で病魔に侵され、お亡くなりになりました由、まことに残念ですし、心からご冥福を祈り申し上げます。

能楽は、曲型的な古典芸術で、厳しい掟があり、形式的にはわれ

われの考えでどうすることもできないように、かっちり固められていますが、それだからこそ五百年以上にもわたって伝統が守られ、将来にも継承されていくのだと思います。しかし、どのような気持ちでその曲と取組み、演者の謡や舞が見所にいる人に伝わるかは、演者の選択に委ねられており、そうした表現力の内面を堀下げてみますと、それこそ無限といってもよいほどの創意工夫の可能性があるわけで、能楽ファンの多い理由も肯けるところです。

何事にも、いつの時代でもいえることですが、稽古ごとに三つのルールがあると考えます。第一は好きになること。第二は師の教えに素直に従うこと。第三は集中することで、やるからには全曲を無本で覚えるくらい徹底的にやれば、やっただけの成果は必ずあると信じます。

宇治先生には、謡や仕舞の技能的な側面だけでなく、高格なお人柄、真剣な稽古、礼儀作法その他全人格的領域にわたって、ご指導をいただきましたし、それは大学風韻会の誇るポイントでもあります。会の今後の一層のご発展と各位のご健勝を祈ってやみません。

ふるさと

新十三回生　段野　治雄

私は今、東大阪市小阪に住んでいる。近大・大阪商大・樟蔭女子大を結ぶ三角形の重心あたりで、不動産広告風に言えば、「文教地区」の真中である。生まれは大阪市西区靱だが、三才の昭和二十年に戦災で焼かれて、今の場所に移った。小中高校時代の思い出はみんなここである。従って私には、うさぎ追いし山も小ぶな釣りし川もない。ただ、近大のそばの小若江に母の生れた家がある。河内木綿の織機を金網の機械にかえて、今も一族が集まり住んでいる。戦後しばらくはその工場の裏に出ると田が広がっていたが、今はもう新興住宅の密集地である。

このような土地・小阪が私のふるさとなのだが、風韻会も私のふるさとだ。何よりもまず、祖父なる宇治先生・父なる藤井先生が厳然としていらっしゃる。長男の荒川先生が、後を継いでいらっしゃる。そして多数の兄弟姉妹がいて、尚毎年増えてゆく。私は年に一～二回里帰りさせてもらうが、いつも皆さんの歓待をうける。時に祖父からおしかりを受ける。父から励ましの言葉を頂戴する。兄から示唆をうける。これらは皆ありがたい。何よりも卒直になれるところがよい。十年来・二十年来の無沙汰も頓着なくいつでも皆の帰りを待っていてくれる。こんな風韻会を維持して下さっている先生

方・現役生に感謝している。
このようにして、私は小坂を地縁・血縁のふるさととし、風韻会を心のふるさとと思っている。

謡・仕舞を始めた頃

新二十五回生　伏見　正章

「そろそろ伏見さんにも「風韻」に原稿を載せて頂いてはどうかと思いまして…」と、お電話を頂載して、「えゝ、いいですよ」なんて無責任にお返事をしてしまいました。お引受けして「これは大変だ」と後悔しても後の祭りです。何ら論ずべき問題意識もないのですが、ここは私共が「風韻会」に入部（入会？）して、謡や仕舞を始めた頃の（全く個人的で恐縮ですが）思い出話に終始することをお許し下さい。

謡と仕舞とでは解り易さの違いもあるのでしょうが、まず心を奪われたのは仕舞でした。入部して二ケ月程後、学生会館六階のホールで「古典芸能発表会」が催され、邦楽、詩吟、落語研究会、宝生会、そして我が部が日頃の活動の成果を競った訳です。中でも印象的だったのは、我が部から出た「清経クセ」でした。大小前から角に来る運足のなめらかなことには目を見張りました。腰が一つの平面を音もなく移動していました。形は流れるような美しさで、扇の動きの何と華麗なこと。形や動きにどのような意味があるか解るようになり始めたのはずーっと後の事、その時はただ仕舞の創り出す雰囲気といったものがとてもエレガントで、「風韻会」に入ったのは正解だ、などと思ったりしたものです。

それでは謡はというと、一年生の三月、淡路島で行なわれた春合宿の「鞍馬天狗」を思い出します。諸先輩の中にも覚えのある方がいらっしゃるかもわかりませんが、一年生の終りの頃は、節の上げ下げ程度はでき、謡もマスターしたなどと錯覚をするような時期のようです。私共も別に声も枯れず、これといった難所もなく、最後の練習日を迎えました。しかも教えて下さる先輩は急用が出来て、本来ならば三時間の練習時間を二時間で切り上げて帰宅されるとの事でした。同期の小島君と二人一緒に習うので、ずいぶんと楽な合宿になったなあなどと思っていたのですが、こういう安易な胸算用は御破算になるのが通り相場というものらしく、この時に習った「鞍馬天狗」も実に厳しいものでした。先輩の謡は何とも迫力のあるもので、「君兵法の。大事を伝へて…」から「…天狗倒しハ夥しや」まで、非常に質感のあるお声で力強くぐいぐいと押してゆかれました。なるほどこれが強吟なのかとただただ圧倒されて、先輩に「やってごらん」と言われても声も出ない有様でした。悪戦苦闘の二時間は声は枯れてしまう、頭はくらくらするで、惨憺たるものでしたが、このとき初めて、謡の表現力の大きさに触れた様な気がしました。（もちろん、自分ができた、というのではなく、先輩の謡を通してですが）「鞍馬天狗」は確かに三番目物などに比べると私共のような、やや感度不良の人間にとっては受け入れやすいものかもしれません。その意味ではこの頃にこういった曲を何曲か練習曲目に

するというのは、長い間の先輩達の知恵なのでしょうが、全く、その時の先輩の謡は今でもはっきりと思い出すことができる程、印象的でした。

先輩のお勧めで宇治先生のお宅に伺いお稽古をつけて頂き始めたのが一年生の終り頃でした。何よりも楽しみだったのは、先生が年輩の御社中にお稽古をつけていらっしゃるのを拝聴することでした。「神歌」「砧」「安宅」「正尊」といった難曲にも接することができ、その迫力や面白さを充分に楽しませて頂いたし、さらに入門用と言われている、五番綴の中の曲でも、それぞれに難しさ、味といったものがあり、単に「何級であれば、どの程度」と簡単に言ったりする無意味さについても教わりました。一年生の中頃までは謡・仕舞そのものについて極端に無知でありましたし（無論、今でも、そう知っているとは言えませんが）いつも人よりうまくなりたいという競争心が強かったためか、内容を味わう間もなく、次から次へと新しい曲を習いたがり、また人が「あれは難しい」などと言う曲を「僕も早く習いたい」などと広言したりで、本当に扱い難い新入生だったと思います。

先生のお宅でお稽古をつけて頂いたり、クラブの先輩や友人と能を拝見に行ったりして、様々な謡に接しているうちに「こんなことではいかん」などと思い始めたのが、この頃、一年の終り頃であったように思います。

卒業後も今日まで引続き、宇治先生の御指導を受けることができ諸先輩、御社中、学生諸君と共に謡・仕舞を楽しませて頂いておりますこの幸せに感謝して、拙文を終えさせて頂きたいと存じます。

学生投稿

―一年生のページ―

書く事にこまって書いたこと

E 32　谷口　敏文

風韻会に入部して、はや八カ月がすぎようとしている。なんとなく勧誘され、なんとなく部員になってしまった。別に入部する気などなかったのに。大学に来るまでは、「能」なんてものには全く興味も感心もなかった。僕にとっては、「能」というものがこの世に存在しているという感覚すらなかった。それが、このクラブに入部して、突然「能」というものが僕の生活に入りこんできたわけだが、はっきりいって、約八ケ月すぎた今でも「能」がそんなにおもしろいとは思えない。どっちかというと見ていてたいくつなものである。まあ弱の音階がおぼろげながらも理解できるのではないかという目処がたったのはうれしいけど。では僕はなぜ自分であまり興味をいだいているとは思えない「能」を目的とするこのクラブにいるのだろう。僕をこのクラブに引き止めている理由は、他へ行く所がないこともあるが、なんといっても非常に居心地の良いクラブであることであろう。正直なところ、僕は「遊び」を主たる目的としてこのクラブに存在している。「遊び」のためにはなかなか便利な所のように思えるのだ。これはクラブにとって、なげかわしいことであろう。しかし、僕にはこれがこのクラブ最大の魅力と感じられるのだ。僕が「能」に対し興味を持てる日が来るのだろうか。来年入部してくる後輩にこんな姿を見せるのは、少々問題があるような気もするけど。まあなんとかなるやろ。

クラブ雑感

L 32　萩野　千夏

私がこの神大風韻会に入ってから早いものでもう八ケ月にもなる。私の生活の中でのクラブの比重はたいへん重く、半分は何らかの形でクラブに関わって過ごしていると言っても良い。もしかしたら半分以上かもしれない。しかし、一年生である今はこういう状態で良いと思っている。今のところ、クラブ活動はとても楽しいし、このクラブに入って学んだことも多い。特に人間関係については、高校時代とは全く異ったつきあい方を知った。人間関係というものの難しさを、改めてというより初めて身をもって知った。けじめをつける、ということの大切さも初めて実感した。ソウダ、それからお酒についても、人間はなぜお酒を飲むのか、飲みすぎたらどういった状態になるか、だいたいわかってきた。これらは皆、言わば思いがけない収獲である。入った時には、週三回のクラブ活動が私の中でこんなに重要なものになるとは思わなかったのである。（高校時代は毎日クラブ活動をしていたので）これだけの収獲だけでもこのク

ラブに入った価値は十分あるが、もう一つどうしても知りたいことがある。――能の世界には何があるのか、何百年間の人々の熱烈な支持を受け続けてきたのはなぜなのか。（実は、私はもともとこれが知りたくて入部したのである）能楽という奥深そうな世界に少しでも触れて、自分をみがき、これから生きていく上での方向感覚でも養うことができたら、と思う。

舞台の恐怖

B 32　小山　徳子

能舞台というのは、恐しい空間です。このクラブに入ってから、何度か舞台を踏んできたわけですが、一向に慣れないのです。

そこは、物理的に見ると、何の変哲もない所です。ただ、少し高くなっていて、明るくて狭い、四角な空間。しかし、引き戸がさっと開かれた瞬間、私の目に映った舞台は、あまりにも、明るすぎ広すぎるのです。私は目を伏せ舞台に進んでゆきます。そして、座って謡い始めます。すると、妙な脱力感に襲われるのです。お腹に力が入らない。顔に血が上ってくる。ここはブラックホールなのでしょうか。それとも、ピラミッドパワー的なものが働いているのでしょうか。

目前には、観客が寛いで座っています。現実の中で、安心して舞台を眺めている人たち。彼らは私の敵なのです。その露骨で容赦のない目。無関心と興味の入り交った目。それでも、私は目を伏せて、謡い続けねばなりません。同じ舞台にいる人間も、よそよそしい、見知らぬものとなります。背後の呼吸を窺い、その声に合わせながら、競い合わねばならぬ場。自分の声がひとり外れて、異様に響く空間。そこはもう、修羅場か地獄の三丁目です。

ほんとうに充実した舞台を経験するために、舞台を地獄から天国に変えるために、鈍と根でもって、日々の練習に励みたいと思うのです。

神戸の町に思うこと

T 32　地　母　音

一年前、ただ神戸という名前が目に止まった、という理由だけで今、この町の住民になってしまった。そのころはただ街の名前に漠然としたイメージしか持ち合わせていなかった。ただ何となく良さそうな気がしただけだったのである。神戸に来たばかりのころは、田舎者らしく街の雰囲気に感動したものである。都市としては決して大きい方に入る広さではないが、町の中心を少し離れても小ぎれいなのが他の町とちがう点だろうか。大きすぎず、小さすぎずよい規模である。しかし同じ日本人の住む町であるかぎり、日本中どこに行ってもかけ離れた違いがあるはずがない。半年もすれば町そのものに感激することもなくなってしまう。ただ町の維持に金をかけているという感想だけが残るようになってくる。その金のかけ方がとてもうまいので、いやみにならないのが救いである。

しかし最近になって神戸という場所に改めて感心している。寮から大学まで歩いて二十五分。その間に海が良く見える場所がある。晴れた日には海が水色にかすんで青い空を写している。そこに貨物船が何そうか点々としているのを見て、まったく単純に美しさを思ってしまうのである。教養部から六甲台へ上がる途中、海を見ては神戸のイメージは青色ではないかと思うのが近ごろの感想である。

クラブと自分

P32　松元　伊知郎

人間は、だれしもいくつかの集団に属すことによって生きている。それが、学校や企業のような大規模な集団であったり、また家族のような小規模な集団であったりする。また、そのような集団の中で自分の占める位置や役割は、それぞれの集団において異なっている。

私の現在の生活を顧みてみると、最も大きな比重をしめている集団は、大学におけるクラブであるように思う。私の大学生活からクラブというものを抜きとって考えると、そこにはただの惰性的な毎日しか残らないような気がする。クラブが自分の生活の中の一つの歯車となっているからこそ、生活の中にアクセントもつくし、充実感も味わえると思う。

今の自分は、この風韻会という集団から様々なことを会得しているからこそ重要な集団であるのだが、これから先、長い間この集団内で生活しているうちには、自分の肌に合わない部分も生じてくるかも知れない。その時に、自分はどのような道を選ぶのであろうか。しかし、そうなったとしても、自分の我がままをあくまで主張したりせず、回りの人の意見に耳を傾けることを心がけたい。そして、自分の体験から学びとった様々なことを、このクラブの後輩に還元していくことも忘れたくはない。また、常にこの集団内から何らかの新鮮なものを会得しつつ、新しい自分を形造っていきたい。それは何もマンネリ化から脱するためではなく、絶えず自分を高める姿勢というものを持ち続けたいためでもある。

クラブについて

S32　中平　徹

クラブについて、何も書くことがない、信じられないと言われるかもしれないが。無論風韻会の活動が沈滞しているというわけではない。活動に対して消極的であるわけでも、悲観的であるわけでもない。風韻会の「活動」謡と仕舞に対して、これが「クラブ」そのものであるという認識にたてば、むしろ状況は容易なものとなる。しかしそうなるとしても――そうでなければなおさら、こう言うほかはない。すなわち、何も書くことがない。

個人的な観点から、「クラブ」のこと――「個人的な」ことではなく――を論ずること。自分にとってこれほど難しいことはないように思われる。そもそも自分にとって「クラブ」とはなんなのか。入部当初はどうであったのか――入部の動機、「クラブ」の印象

は、能楽について、等々。しかしもはやこれらの命題はそれほどの意義を持たないであろう。これら自体自分にとっては単純・明白なものであるし、またそういった「内省」の過程はある時期・ある出来事をターニング・ポイントとして帰結していったのである。その渦中では「内省」が「クラブ」への認識そのものであり、「内省」は――通常そうであるように――純粋に「個人的な」ものだった。

ある意味で今の自分は「クラブ」に対して空白であると言えるのだろうか。それならば客観的に「クラブ」を見すえることができるのではないか、という論議がなされるかもしれない。風韻会としての「クラブ」。それは謡と仕舞を活動内容とし、合宿や発表会があり、一方では（一部では　）遊びが盛んで、また「縦」のつながりも強い……。どんなに詳しく描写を進めたところで、ここでは既にその必然性を失っているであろう。「クラブ」としての風韻会。ここで我々は立ち止まらざるを得ない。二十数人かの、二十歳前後の男女が「クラブ」として風韻会を組織すること、それぞれが「クラブ」人として所属すること、その始まり、展開、そして終結。全体として、また一人一人においてのそれを認識する上で、我々は「個人的な」視点を持ち得ず、また持ち得たとしても「クラブ」または「クラブ」人の現状に対して甚だ無力であったのだ。

まさにこの点において、こう言うほかはないのである。クラブについて、何も書くことがない。

ドキュメンタリー　最後の〝中〟

～幻の国士無双～

A35　まつばっこ

昨夜、いつものようにすずめ荘では四人の男たちが卓を囲んで熾烈な戦いを操り広げていた。メンバーは風韻会屈指の雀士である池田さん、現在、学連の委員長になるかどうかの瀬戸際に立たされている谷口、最近、混一色にかかっているちゅうべえ、それに私であった。

前半戦は小場で点棒の出入りは少なかった。南一局で私が初めて満貫を谷口からアガリ、池田さんが僅かにプラスでトップ、ちゅうべえと私が原点前後、谷口がひとり沈んで迎えた南二局。前局の私の満貫に刺激されて場は荒れそうな雰囲気であった。ドラは中。私としては、ここでアガればトップに立てるし、ゲームの流れを完全に自分のものにできる重要な一局である。しかし、配牌を見て私はガックリきた。公九牌が七種七牌。嵌張が二つあるだけでドラもない。流すこともできないし、ツモに恵まれても、普通にまとめていったのでは仮に聴牌したところで、とても自慢できるような手には育ちそうにない。仕方なく、オリながら国士を狙うことにした。

ところが、ツモってくる牌は公九牌ばかりである。五巡目には一向聴になった。気がかりなのは、どうしても必要なドラの中の所在であった。早めに中を引き、ドラ待ちは避けたかったが、九巡目に

はドラ待ちで聴牌した。私は場に一枚もきれていない中の所在を考えた。誰かが、暗刻で待っているとしたら早めに仕掛けているはずである。場にはそういった状況はなかった。仮り暗刻で待っているとしても一枚は残っている。それに暗刻で待っている人がもう一枚を引けば暗槓でも国士ならアガれる。もし、二人が対子でかかえて持ち持ちになっているなら、リーチのかかる頃である。リーチもかからない。まさか三人がドラを単騎にしてまでこだわってることはあるまい。そこまで考えたところで私は少なくとも一枚は山の中に中が残っていると判断した。私の判断は正しかった。実際、中は山の中に一枚残っていた。私は指先に力を入れてツモったのだが、結局、中、東の双碰待ちで聴牌していた谷口にツモあがりされてしまった。ツモ、中、三色、ドラ四（赤ウーピンを含む）の倍満であった。私の夢は断たれ、国士無双は幻に終わった。

けれども私は負け惜しみではなく、私はちっとも口惜しくなんかない。それは谷口の手が大きかったからではない。別の誰かがピンフのみであがっても私は口惜しがらなかっただろう。麻雀とはそういうゲームなのである。僅か数分間に大きな夢を見ることが可能であり、状況を判断しながら知的に手段を作っていく。そこに麻雀の持つ底知れぬ魅力があるのである。そのため夢（この場合は国士）の達成は極めて困難であるが、困難であるからこそ、それに挑戦する価値があるのである。

結局、その半荘はラス前でも満貫をツモった谷口が逆転で勝利をつかんだ。けれども、戦いは終わることなく、男たちは夢を追い、さらに戦い続けていくのである。

冬

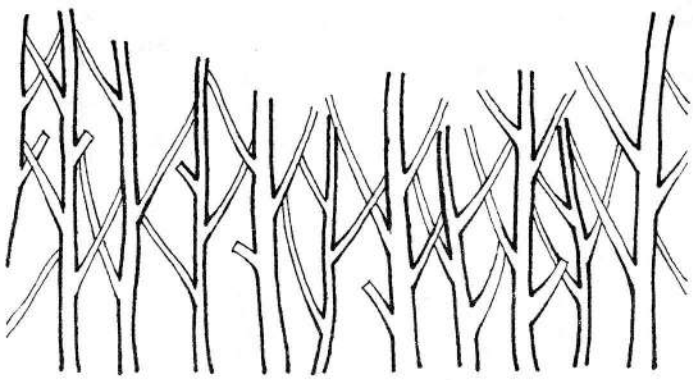
L 32　19才の乙女
藤屋のペコちゃん

湖面に
雪降り
羽二重を
織るよ

木々に
雪降り
白き実を
つけるよ

ときもなく
おともなく

睡きままに
雪降り
つもるよ

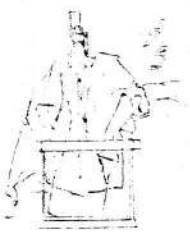


―二年生のページ―

僕にとってのクラブ

E31　銀田　一

僕は中学の一時期野球部にいたことがあった。そして、今は風韻会にいるわけだが、この二つのクラブにおける僕の存在意義というようなものは、ある意味においては大きく異っている。前者における目的は野球そのもの、野球それ自体であった。しかし風韻会において僕が求めているものは、能であろうか。残念ながら「否」と答えざるを得ないだろう。では能のクラブである風韻会になぜいるのか、僕が風韻会に入ったのには、それなりの考えときっかけがあったわけだが、今の僕をこのクラブに存続せしめる（といっても僕は能動的に存続しているのだが）のは、やはり風韻会の人達であり、風韻会の持つ雰囲気（その家族的な）である。その意味では、クラブの練習時間よりは、それ以外におけるクラブの時間の方が、僕の求めるクラブと言えるかもしれない（そのため練習時間が全く意義を持たないとは限らない）これは本来のクラブのあり方と違うかもしれない。野球なら野球を求めて、その課程から、いわば二次的なものとして人間関係等が生まれてくるのかもしれない。しかし、クラブに対する個人の意義というのは千差万別であろうから、クラブのあり方に対する一般論は避けて自分のことに話を戻そう。先に野球の例をあげたが、僕が能をやっているのはその逆といえる。つまり、僕は能が好きで能をやるのではなく、能をひとつの媒体として人間関係を得ようとしているのである。しかし、それに加えて能が好きで能がやれたらそれの方がずっといいだろう。たとえ人間関係を得るために能をやっていたとしても、能に全く興味を持たずに練習を繰り返すとしたらその練習はほとんど意義を失ってしまう。しかし今の僕は、能が好きだ、興味を持っているとは口に出しきれないだろう。それでも今、僕にとってクラブは欠かせないものであり、その存在はしだいに大きくなってきた。なぜか。それはクラブが僕の生活の一部となってしまったからである。僕にとって、クラブの人達との付き合いは重要な生活基盤であり、それ故僕の生活はクラブとは切っても切れないものとなっているのだ。そしてもし、風韻会の人達だけでなく、謡も好きだ、仕舞も好きだと言えるようになれば、つまり媒体が単なる媒体でなくなった時、本当に充実したクラブ生活がおくれるだろう。それには多くの時間と努力が必要であろうけれども。



喫茶と御食事

ニュー　浜

神戸市東灘区御影本町4丁目8番17号
ＴＥＬ078(811)６９４４

この一年半ちょっとをふり返って

E31　野田　功

「風韻会」という、この由緒あるクラブにフラリと迷い込んで、はや一年半が経過しました。時を同じくして入部した二回生は、当然全員一年半たっているわけですが、その価値は、個人々々の過ごし方によって千差万別だと思います。自分の目標をしっかり持って過ごしてきた人、何となくのんべんだらりと日を送ってきた人（だれとは言いませんが・・・）練習以外のコンパ、レクリエーションのみに情熱を傾けてきた人（あえて名前は出しませんが・・・）etc。

さて、僕の場合はどうかと今振り返って考えてみると、前に掲げた三つのタイプの中の二番目にいちばん近かったように感じます。練習もあまり熱心だったとは言えないし、自分で何か目標を持って練習にとり組むということもありませんでした。ただ与えられた課題を消化してきただけ（多分に消化不良ですが・・・）と言えるでしょう。もっとも、こんな事ではいけない！と常に心の中で叫んでいるのですが、どうしても意志の弱さで、つい楽な方へ、楽な方へと傾いてしまうのです。

年が明ければ幹事学年。正直言って、今の状態でこの大役を授かるのは非常に不安です。いろいろな方々から助けていただかなければならないと思いますが、その助けをできるだけかりなくても済むように、自分自身もっとしっかりしなければならないと考える今日この頃です。

ノウシンギングアンドダンシング

P31　蒟　蒻

日本に来て三ケ月ほどになる米人と話す機会があった。その際に私が能楽部に入っているというとそれは良いことだと非常に関心を持たれた。それだけならよいのであるが、歌舞伎などもひっぱり出してきていろいろ質問をされた。全く閉口してしまった。クラブに入って一年半になる。能楽部だなどと偉そうなことを言っても結局人に説明すらできないのである。ひしゝと力量不足を感じた。

しかし、この時に何といっても印象的だったのは非常に関心を示されたことである。

例えば、私が友人に能楽部に入っていることを話すと「へェー」とかひどい時には、「変わってるなあ」と言って笑われるのである。好奇心は持たれても興味を示されることは少ない。これは能楽に関してだけでないと思う。日本の伝統芸能に共通のようである。

外人は日本人が当然知っているものとして話しかけてくるが、それに応ぜる若者は全く少ない。私ももし能楽部に入っていなかったらたぶん友人と同様であったろう。それが全くささいなきっかけで能に触れる機会を持つと、そんな古くさく何か避けたくなるという先入観に反するものであった。逆に、謡の中の拍手にうまく乗れる楽しさ、お腹から声を出す気持ちよさに無理のない自然な情熱を感じる。ちっとも古くない。

私は何も伝統芸能を少しばかりの経験で、人に奨励しようなどと

大それた気は毛頭ない。しかし、長い間、独特の日本人気質を反映した日本人をよく知っている伝統芸能を私たち自身で興味を持ちにくい環境にするのは寂しいことであるように思われる。

思乃弄愚

L 31　浜田　伸子

時がこのまま止まればいいと思っています。いえ、停止してしまっては困るのですが、そうですね、現状維持というわけにはいきませんか。今がいちばん好きなのです。先のことなど、神ならぬ身の知る処ではないから、いちばんなんて月並みな最上級を使うのは、少々気恥ずかしいけれど。それにしても、目前に迫った「幹事学年」なるものをよくよく考えてみる時、まるで「障害物マラソン」のスタートにでも立たされているような気がして、どうしても足が竦んでしまいます。

そう、障害物マラソン。我ながら、なかなか巧い表現ではないですか。四二・一九五キロは、車で伴走するならどうということはないでしょうけれど、「さあ、今度はお前の番だ。気をつけて走ってこいよ」なんて背中を叩かれたって、「それじゃちょっと行って来ます」とはいきませんよ。何といっても、障害物はどこにあるのかわからない。どんなものかもわからない。運動オンチにかけては国宝級のこの私に、さてさて乗り越えられるものなのか。甚だ不安なことなのです。

だから、時がこのまま止まればいいと思っています。今がいちばん好きなのです。何故って今はスタートですから。前途多難なレースであることは間違いないと思うけれど、スタートラインに立たされる気持ち、決して悪くはないですよ。いくら頼りない私でも、それはそれなりに自負だって持っているんです。大きな不安と小さな自負と、ずっしりこたえる緊張感と、土壇場の開き直り。気持ちに隙がないっていうんでしょうか。ちょうど、切戸の開いた瞬間に似ています。この舞台が素晴らしいものになるんじゃないかという予感。惜しいかな、でもそれはやはり瞬間でしかないのです。一歩踏み出してしまえば、もうそこは明らかな現実そのものであって、ゆるんだ心を不安とあせりが占領してしまう。

だから、時がこのまま止まればいいと思っています。今をもう少し、大切にしていたいのです。きっと、スタート直前の緊張感などというものは、頂点に達した瞬間が全てであって、それを持続させるというのは本来不可能なのでしょう。不可能だからこそ、今にしがみついていたい。まるでだだっ子ですね。

お好み焼
各種定食
よし田
第一六甲センタービル2F
阪急六甲山側　841—9588

ユーモアについて

T31　ピーチパイ

ユーモアとはどういうことだろう。自分自身の解釈では人を笑わせる能力という感じ。広辞苑をひく。ユーモアの項はわずか一行。「上品な酒落。上品な滑稽」とある。上品でなければユーモアではないのか。いかにも広辞苑チックな書き方だなと思う。桂枝雀にいわせると次のようになる。「ユーモアとは緊張を緩和させるものである」これればかりは新村出より桂枝雀の方が正解という気がする。

次にいくつかの具体例を見てみよう。

①「ハトが何か落としていったよ」　「フーン」

②「ねえママ、お父さんが昼寝しているよ」　「よくもまあこの真夜中に」

③「定期が落ちてる」　「名前は？」　「あれ、書いていない」「区間は？」　「それも書いていない」　「期日は？」　「それも書いていない」　「じゃあおれはなぜこれが定期だとわかったんだろう」

④ビクトルユゴーが自分の本の編集者に出した手紙がわずかに、「？」の一字というか一記号。それに対する編集者の返事が「！」

さて今四つの例をあげた。④は実話である。ユゴーが自分の本の売れ行きを尋ねた時の手紙である。露骨に尋ねるのが嫌だったので記号で尋ねたのである。編集者も粋なもので記号で返事をしたのである。さてそこで右の四つを較べてみよう。①はすごくポピュラーなものだ。しかしこれはユーモアの域には達していない。広辞苑の定義には当てはまらないし緊張を緩和さす能力もなさそうである。④はどうか。これは全体としてはユーモアになっていない。しかしこの編集者は相当なユーモアの持ち主であると思う。これこそまさに緊張の緩和の良い例である。では②と③はどうか。広辞苑の定義からみればどちらも立派なユーモアである。③などは最初のうちこれはどういう結末になるのだろうと思う。これがすなわち緊張である。そして結末を読んで「なんだ、そうか」と思う。この瞬間に今までの緊張がほぐれるのである。だから③は立派なユーモアといえる。

結局ユーモアの価値というのは一瞬のなごやかなムードをかもしだすことにある、と思うのである。自分でも何を言ってるのかわからなくなっていたので最近気に入った話をもう一つ紹介してへたなユーモア考を終らせて頂きたい。

「おいこの万年筆少しもインクがいっぱいにならない。もう三本目のインクびんだというのに」

「おい見ろ。あいつ体が真青やぞ」

―三年生のページ―

今、生きていますか

T30　藤裏　聡

今、生きていますかと聞かれた時、胸をはって生きていますと答える事ができるように生きていたいと思って、この一年間過ごして来ました。しかし本当にそうあり得たのかと振り返ってみますと、甚だ自信のない限りです。積極的に働きかけているように見えて、実はそれは物理的にのみ言える事で、心理的には幹事長という立場にあるという義務感に動かされていた所がたくさんありました。これはこのクラブが自分達のクラブなのだという意識が欠けていたからだと反省しています。しかしこの場でひたすら謝罪するだけに終るよりも、今後の自分の姿勢を公言する事の方がむしろ緊張を要するものと考え、これからの一年について書く事にします。

四年生という学年、あれほど遙かに感じたこの学年を終に迎える時が来たのです。この学年は幹事学年を終えたとは言え、やはりクラブの中心には違いなく、責任を持ってクラブに参加すべき学年なのです。ゆとりのある学年ですから、客観的にクラブを見つめ直して、常に積極的に参加していくつもりです。またこの学年で迎える行事は「またの機会」を持たず、やり直しが利きません。それだけに一つずつ確実に消化し、大袈裟かも知れませんがその時その時を精一杯生きているかどうか確かめながら自分で足跡を残して行きたいと思います。そして最後の行事を迎えた時に、去り行くクラブと友にさわやかな涙を流したいと思います。学生生活最後の一年間、自分自身に「今、生きていますか」と問いながら生きて行こうと思います。

最後になりましたが、宇治先生・荒川会長、ならびに諸先輩方には、多大なる御尽力を賜わり誠に有難うございました。今後ともよろしくお願いいたします。

コンパ

L30　小谷　直子

会計という役をつとめさせてもらったおかげで、コンパのお世話役もやらせてもらった。会費を集め、会場を予約し、お料理を決めだいたい一人当りビール一本として、残金でお酒の限度数を決める。こうして決めた予算を念頭に、当日は、先輩、同輩の意見をききながら、頃合を見てビール、お酒をだすのだ。ここで、お酒の数というのがくせものである。それによってそのコンパがどんなであったかまでわかる程。歓送謡会懇親会、新歓コンパ、秋季大会懇親会、これらの出席者数は大差ないが、お酒の数は、二十一本、六十本、四十五本と大変な違い。もっとも、秋季大会懇親会に関しては、これでよかったんだろうかと反省しているのだが―、ちなみに、新歓コンパのお酒の数を、一昨年、昨年、今年と比較してみると三十五本、六十本、六十本である。お酒の数が増えるということは、酔い

つぶれる下級生の数も増えるということであり、最近の傾向として酔いつぶれる時間も早くなってきているように思う。従来は、鍋をつつきながら語り、（新歓コンパ、合宿のコンパ等では芸か、みんなで歌ったりして）会がもりあがっていき、お酒が進んでつぶれる人がでるというパターンであったように思う。従来のコンパのすべてが成功した、楽しいコンパではなかったが、親睦というか、ＯＢと学生、男子と女子の接点を探して、楽しくやろうという姿勢が伺えていたように思う。それなのに、会がもりあがる前にお酒のピッチがあがり「酒・酒」という声、つぶれていく下級生、ただばか騒ぎをして、つぶしつぶされ、介抱し介抱され、それによって親睦、先輩と後輩との絆をというのではあまりに味気ない。程よく飲んでうち解けて話し、みんなで楽しむ。コンパはこうありたいものだ。練習、舞台以外で男子と女子、学生とＯＢが集まり、三時間を共にする数少ない機会なのだから。――えらそうなことを書いてきたがこれは、一年間のコンパのお世話役というお役目を終えて、私自身が反省しているということなので、あしからず。

遊び人×文学論×四十八手

Ｊ30　柴鳳　王

何かを始める時――今の場合は、一篇の、たぶん不甲斐ないエッセイを書きはじめる時――ともかくもひとまずこうしよう、と考える。こうしよう――なにやら漠然としたプランが浮び、しかし先がどうなるかハッキリ見えるわけではない。このエッセイの結びのセンテンスが、どのような語句から出来上がるかは皆目見当もつかないし、のみならず、次の一行としてどんな言葉をどんな語順で選んでいくのかさえ、この一つのセンテンスを終えようとする今、やはりわからない。

そこで、書きとめたばかりの「こうしよう」という文句を、「こうしょう」と書きかえてみる。「こうしよう」という心許無い構想が「こうしよう」を「こうしょう」に変えたくらいの小細工によって、こうしょうな考えに飛躍するはずがない――と、あきらめるのは早いかもしれない、と思い直したのは、実はこのエッセイを書きかけたところで掻っ込んだラーメンにコショーをふりかけた時だった。

少なくとも言葉遊びについて書く以上、とりわけ高尚なことを書かないまでも、せめて巧笑をかうくらいのことを書く義務はあり、それによって功賞や功章や厚賞を与えられないにせよ、公称数千部それが印刷されてもたぶん一枚の交鈔さえ貰えないにせよ、紅絹にくるんだ紅晶の光象のようにまばゆい文を書けないまでも、せめて高商が過ぎれば冬が来るとか黄鐘の次は師走だとか、当り前のことをつづった講章を口誦して交睫を誘う真似だけはしたくなく、同じ真似でも能楽の広精の域に達せないにせよ、古今東西の一流の言葉の遊び人の高蹤に荒悚の念を抱きつつ、抱きという語から突如連想される最近の風俗史誌上の公娼や紅粧との交渉の意義を理解しえない我が身を好照に照して嘆くわけもなく、むしろ嘆くべきは工商の業もしくはなかんづく狡商の業のみが盛える文字の世で工匠や巧匠の

芸が軽んじられることであり、かと言ってそのことについて好証や公証をひきつつ考証もしくは口証することでそのことの後証を残すのがここでの目的ではなく、つまり口承もしくは口称の文学の世で公傷を負うとか咬傷を負うとかいうことについて高声をはりあげることは、人気のない工廠で降将が何やら高唱するのにも似て、それよりは文章そのものが高笑し哄笑して宏敞たる絳霄へと高翔し翺翔するようなものを書きたくて、それは好尚というより、ただの物好きかもしれないけれど、言葉遊びの一本の黄梢にならないとも限らなくて、結局、言葉というものはそれ自体まだまだ堀りつくされていない鉱床であると言えるだろう。（この疲れがそれを代弁している。）

筆者より読者へ

このエッセイは是非とも音読して頂きたいのです。有意味と解された方はどうか行賞を御考慮下さい。無意義とされた方、一切の責任は私にはなく締切りの時間にあることを一言付加えておきます。

筆者より編者へ

筆者自身、広辞苑なしに校正の自信はなく、これ以上筆者に精神的肉体的疲労を被らせず、論理的情念的欠陥を露呈させぬよう御思量されることを祈ります。（参考文献　旧版広辞苑）

☆　☆　☆　☆　☆

〈卒業にあたって〉

ー四回生からー

大学生活は、あっという間に過ぎ去ってしまった。思えば、大学時代は一生のうちで最も時間的余裕と活力に恵まれた時代である。社会人になれば、仕事に追われる多忙な毎日が続くのは覚悟している。自由だった大学生活をしみじみと回想する時、きっと風韻会の事も思い出すだろう。（E29　嶋畑佳久）

今思えば、クラブに明け暮れた四年間だった。でも、それはそれで満足している。クラブでの多くの体験は、社会にでてからの私の支えとなるだろうから。（J29　佐野邦子）

クラブでの四年間、様々な人々と出会い、話すことができ、内向的な私にとっては少なからず有意義であったと思う。これからも、人との出会い、つながりを大切にする人でありたい。（J29　田中邦子）

やめていった後輩の顔がよく思い浮かびます。四年間、続けられたことはそれだけで幸せなことだったと思います。（B29　反田雅之）

ようやく卒業ですが、あと二年ほど大学にはいます。また、ひょっこり部屋へ行くかもしれません。その時はよろしく！（S29　古沢　智）

誌上研究

能の沈黙について

B 29 反田　雅之

どういう訳か、能会では演能終了後に、ワッと拍手される事がない。いつもの感覚で拍手したりすると〝あれは何も知らないな〟ということになってしまう。鏡の間に入るまでは演能は続いていると考えておられる観客もおおいし、演者の中にも、神聖な状態から普段の自分に戻ってくる心理的な過程が、拍手される事によって崩れてしまう、緊張感がなくなると嫌われる方が多い。理由はいろいろであろう。

ところで、さまざまな思惑をよそに、この演能終了後の見事なまでの沈黙は映画や他の劇とは多分に異った特殊な効果をうみだしている。いわゆる余韻というもの以上に能にあっては重要に思えるのだが、これについて私の感じている事をお話させて頂きたい。

いつ頃からかは解らないが私は、能楽を見るときに妙な感覚にとらわれる事がある。重く、静かなクセから大鼓、小鼓、笛、太鼓の打ちならされるキリに向うに従って、胸の高鳴りがしてくる。やがて不意に（いつもそれは予想もつかない出来事のように思われる）留拍手が打たれ、太鼓や笛が一調子高く響くとあたりは急速に冷えきり静寂の支配するところとなる。と、私の心は、この沈黙が信じられず、ぽっかりと穴のあいたようになる。囃子方が去り、地謡が去り、そうして沈黙が現実のものだとわかると、心のひだひだが、虚しい気持ちでいっぱいになり、それはいいしれぬ不安感に変ってゆく。満足感などまったくない。いい能であればあるほど、この気持ちはいっそうのものとなる。

いったいこの気持ちはどこからくるものであろう。沈黙は何を意味しているのであろうか。

能は何もないところから始まる。舞台装置もなければ、引幕もない。ただ空間だけがぽっかりあいている。やがてワキが登場し、彼が名のることによって場面設定が行われる。場面が変わってもそれは大部分言葉によってなされる。複雑な動作、細かい動作も簡略した形で示される。この中にあって、理解しようとする観客は自身のイメージを総動員させ、あるいは大道具方に、あるいは演出家とならねばならない。能を懸命に見ようとすればするほど、観客はこの作業に没頭しなければならない。いつしかこの能動的な鑑賞法は能あるいはストーリ自体に観客をひきづりこみ、時には、さも舞台が現実であるかのような錯覚に陥らせる、虚に徹する能の手法は、実に徹する映画などが受動的に観客に受け入れられるのに比べ、能動的作業を強いるが故に、観客を実に近づける作用を持っている。

今一つの能の特徴は、それが単なる対話劇ではなく音楽、舞踊、美術、文学をも柱とする総合演劇であることにある。確かにストーリを追うとクセや語りに展開の中心があり、そこからキリまでは収

束の過程となる事が大部分である。しかしながら、舞踊・美術などの視覚的な捉え方、音楽・文学などの聴覚的な捉え方をすると、劇全体としての盛り上がりはストーリでの場合とは別のものになる。御存知のように、キリのほとんどは仕舞として取り上げられているし、序ノ舞、中ノ舞といった舞の類はキリの前、少なくともクセの後となっている。また、このあたりの装束は他にはない美を見せてくれる。さらに、太鼓も登場し、時として地謡が聞こえなくなるほど囃子は強くなる。キリの部分は詞章としても秀れている。（後に述べる事の関連ともなるのだが、こうした面で特によくできているのは夢幻能である）ごらんのように、トータル演劇として見たときの能は中心を最終部分においており、実際の我々の緊張感はキリに向かうに従って累増してゆくのである。そして、キリで最高頂を迎えるわけである。

この二つの能の特性が相乗的に影響し、我々は虚構としての能を忘れ、実としての能に没入してしまうのである。だが、突然に、囃子や地謡の一声を合図として、キリの中で忘我の真中にあった我々は、もとの何もない空間と沈黙の世界に突き離されてしまう。眼前にひらける桜の嵐山も、目もくらまんばかりの咸陽宮も、月の中で異様な美しさをみせる在原寺も、一瞬にして消え去ってしまう。その静寂の中で、意識が自問自答を始める。〝いったい我々が見たものは何であったのか。確かに、その時は現実であったのに今はただ沈黙と空間だけではないか……〟幕もおりないから、黙々と行われる撤収作業は、我々をいっそう突き離された気持ちにさせる。宴の後のような虚しさだけが残る。その気持ちを評論家増田正造氏は次のように書いている。

〝荒れ狂った蛇体がはげしく去り、祈り伏せた住僧達も静かに消え狂言方の後見が舞台を重く頒し続けた鐘の作り物をおろして運び、囃子方も、地謡もいなくなったあとのむなしさ、人びとが全精力をあげてぶつかりあったあとの、むしろ悲しい充足にひたってこそ、「道成寺見たるにてはあれ」と兼好なら言うだろう。〟

ところでこれと同じ思いを持つ者が今一人いることを御存知だろうか。実はワキなのである。特に、夢幻能におけるワキ僧はほとんどがこのような胸中を持つ設定となっている。例えば、松風の中のワキ僧は、汐汲女のもとに一夜の宿をとる。彼がそこで見たものはいにしえの事と思っていた松風、村雨の優美な姿であった。ところが夜が明け、ふっと気がつくとそこには昨夜の美しい情景は跡方もなく消え、ただ松を吹きわたる風の音ばかりであった。井筒の僧しかり、松虫の僧しかりである。我々が能を見終わって抱く気持ちとそっくりではなかろうか。

このように考えてくると、一つ興味ある事実に気がつく。ワキ僧がまのあたりにした一大ページェントと我々の見る、ワキ僧を含めた能、ワキ僧と我々といった具合に、それぞれを対比させると二重構造の図式が得られるのである。

ワキ僧に見る二重構造

（僧が見る一大ページェント＝僧）

＝

我々の見る能舞台　＝我々

＊上下はそれぞれ一つになっている

従って、我々の経験する事が舞台で展開し、我々の投影である僧がそれを見るのである。我々は、劇中人物にもなりえるし、我々自身の姿を鏡を見るように見ることもできる。

沈黙は、能の演出効果としては非常にすぐれている。特に夢幻能を味わう上では、不可欠な要素であろう。近頃、能番組の傍らに、「拍手は御遠慮下さい」という言葉がよくそえてある。沈黙を一つの演出効果としてとらえていると見てもよいだろう。さらに大胆な発想をさせて頂けば、この効果は能創作中、あるいは初期の演能において、はっきりと演出効果としての地位を占めていたのではとも考えられる。世阿弥はこれを計算に入れ井筒を作ったのかもしれないし、あるいは演じたのかもしれない。拍手が近年以前にあったかどうかを考えるとあながちバカげた発想とも言えまい。

ともかく、その重要な効果を現代の我々は、拍手や現代人特有の性急さで無効にしているようである。自らの手をもって、能をくだらなくしている。

素人発想でいろいろ勝手な事を述べさせて頂いた。何故、私が能を見るにつけある虚しさを感じるのか多少なりともわかったように思う。さらに、先に述べた沈黙の中の意識の自問自答を続けたい。

〃いったい我々が見たものは何であったのか。確かに、その時は現実であったのに今はただ沈黙と空間だけではないか。……ひょっとすると、我々の日常もこのようなものではなかろうか。そして、今能を見ている自分自身さえも。〃

かの沈黙は、我々に、今一度自分達の住む世界を眺めさせ、内省の場をあたえてくれる。それは散ることをふまえた文化の中にあって散るから花は美しいと言った世阿弥が、散らすまいとつとめる文化を導入しつづけ、壁につきあたってしまった現代人に送ることばのようでもある。

スポーツ用品のことなら

御影スポーツ・センター店

神戸市東灘区御影本町4丁目7－17
阪神御影駅前
TEL (078) 811－6314

あしあと

昭和五十五年度

T30　藤裏　聡

三月

六日（木）～十二日（水）　春季合宿

於香川県小豆島郡内海町　民宿「きらく荘」

練習曲　一年「養老」「嵐山」「箙」「東北」「殺生石」「鞍馬天狗」「小鍛冶」。二年「高砂」「頼政」「井筒」「三井寺」「鉄輪」「放下僧」「安達原」

瀬戸内海に位置するとは言うものの、まるで南国の島に居るような暖かい日が続いた。

十四日（金）　慰労ハイク

於交通科学館・大阪城公園

二十二日（土）　歓送謡会　於学生会館六階ホール

舞囃子「忠度」（田中千）「羽衣」（福岡）「融」（岡田）

他、素謡九番、連吟二番、仕舞二番。

宇治先生、荒川、米花、井川先生、杉本、里井、牧、原、久下段野、木村(富)、伏見(正)、山岸、田中(明)、岩崎、伏見(和)先輩が御出席下さった。

四月

上旬～下旬　新入生勧誘月間

クラブ員全員が学内をかけ回り、男子七名、女子二名の有望新人が入部。おかげで部室は急に賑やかになった。

二十七日（日）～二十九日（火）旧三商大交歓会　神大主催

第一日目、あいにくの雨で予定を変更してボーリング、二日目、神戸大学学生会館にて発表会、後、コンパ、三日目、ソフトボール大会等々…。部員一同、充実した三日間を過ごした。

他方、一橋大が部員数激減のため参加できず、まことに残念であった。

六月

七日（土）　新入生歓迎コンパ　於六甲パーラー

頼もしい一年生が増えて、活気に満ちていた。

十五日（日）　関西学生能楽連盟春季大会　於香里能楽堂

仕舞「合浦」「杜若」「班女」「敦盛」「小袖曽我」「経正」「胡蝶」他、連吟二番。

七月

六日（日）　四大学合同発表会　於上田能楽堂

素謡「箙」「橋弁慶」他、仕舞八番、連吟二番。

十一日（金）　謡納会　於部室

八月

五日（火）～十二日（火）　夏季合宿

於兵庫県城崎郡日高町　民宿「陽喜」

練習曲　一年「竹生島」「菊慈童」「経正」「田村」「羽衣」「小袖曽我」「富士太鼓」「猩々」「紅葉狩」。二年「賀茂」「敦盛」「清経」「熊野」「善知鳥」「班女」「舟弁慶」「鵜飼」。

山岸、伏見(和)、戸田、福岡先輩の御参加に、涙を流すことしきりであった。

山中の空気はおいしかったが、毎日決まったように降る雨にはいささか閉口した。

二十四日（日）　OB会懇親会　於三宮スカイサントリー

三宮の街並を見降ろす眺望の中で行われ、多数の先輩が参加されなごやかなムードが盛り上がった。

十月

二十六日（日）　関西学生能楽連盟秋季大会　於堺能楽会館

素謡「竹生島」、連吟「田村」。

十一月

八日（土）九日（日）　六甲台祭園遊会

今年は例年の雨は免れたものの、大風が吹き荒れ、相変わらず天候に恵まれない園遊会だった。

十六日（日）　宇治風韻会

二十二日（土）　五十五年度秋季発表会

於学生会館六階ホール

舞囃子「敦盛」（藤裏）「班女」（小谷）「芦刈」（門之園）他、素謡八番、連吟二番、仕舞二十一番

宇治先生、荒川先生、杉本、牧、佐々木、尾島、志智、伏見(正)岩崎、遠藤、伏見(和)、黒川、田中(千)、岡田先輩が御出席して下さった。また終了後の懇親会にも多数の先輩が御出席下さった。

三十日（日）神戸商科大学自演会賛助出演

連吟「羽衣」、仕舞「経正」「松虫」

十二月

二十一日（土）　謡納会　於部室　その後クリスマスコンパ

第二回神大風韻会ＯＢ会報告

とき　昭和五十五年八月二十四日（日）
ところ　三宮交通センタービル六階〃スカイサントリー〃
会費　八千円
参加者　藤井茂、荒川祐吉、米花稔、福光家慶各先生
杉本孝昭、牧千雄、里井三千雄、林哲夫、提文男、永田守男、佐々木肇宏、戸次威左武、段野治雄、尾島洋三、山口剛、根岸義明、伏見正章各先輩

今回は、里井、牧両先輩のお世話のもとに、藤井先生御受勲の祝賀を兼ねて行われた。途中、記念品の贈呈、各先輩の御挨拶等があり、最後までにぎやかな会となった。

会計報告

収入	
会費	128,000
寄附金	335,000
繰越分	3,495
計	466,495

支出	
会場費	165,896
記念品代	68,500
通信費	24,875
写真代	2,865
保留分	205,359
計	466,495

決算報告

自昭和５５年　１月　１日
至昭和５５年１２月３１日

収入		支出	
今期徴収部費	248,030	先生謝礼	174,000
大学援助金	50,000	歓送謡会	169,795
先輩寄附金	254,600	秋季発表会	145,738
風韻広告料	45,500	四大学発表会	24,000
発表会役料	157,000	学連費	24,000
繰越金	336,257	学連役料	15,960
		通信、交通費	78,947
		風韻印刷代	90,000
		文具費	11,718
		写真代	18,367
		雑支出	1,400
		来期繰越金	338,461
	1,091,387		1,091,387

新役員紹介

幹事長	E31	井関　浩一
副幹事長	L31	浜田　伸子
渉外	T31	安原　正樹
渉内	E31	野田　功
文総	E31	池田　淳
会計	D31	道本　浩子
学連役員	E32	谷口　敏文
学連委員	P32	松元伊知郎

幹事長になってしまった現在の心境

E31　井関　浩一

風韻会幹事長。入部当時この名を聞いて、連想したのは、宴会の幹事とある政党の幹事長であった。それから二年。まさか自分がこの役職に就こうとは思ってもみなかった。これから一年間、自分がクラブ運営の中心となり、クラブを引っ張っていかねばならない。

その責任の重さを考えると、非常にうっとうしくなり、疎ましく感じられる。また、引き受けた以上、苦労は覚悟の上なのだからとにかく頑張らねばと考えることもある。この二つの矛盾した感情が交互に入れかわり、時には前者の支配力が強まり、時には後者の支配力が強まるという、感情不安定な状態にある。

これまでクラブに対してわりと受動的であったが、これからは百八十度転換して、能動的に取り組まねばならない。しかし、このことは自分の心がけだし、それほどむずかしいことでもないと思っている。むずかしいのは、技術的なことと実務的なことである。技術の方は、練習によって解決するしかない。実務面では、創造性の欠如から、新しい試みは望めないかもしれない。しかしこれまでなされてきたこと―つまり伝統的なこと―は頑張ってやらねばと思っている。しかしこれは伝統の継承という意味ではない。伝統的なことを行うことによって新しい伝統をつくっていくという意味である。両者は結果的には同じことになるかもしれないが、それを行う時の考え方は全く違ったものであると思う。

風韻会には、一年を通じてさまざまな行事がひしめいている。時には、行事が連続してあり非常に忙しいこともある。しかし行事に流されて、なんとなく一年過ぎてしまったということにはなりたくない。流されずにやるというのは非常にむずかしいことだと思う。どうしても流されてしまいがちになるだろう。しかし、ここでしっかりとした自覚を持ってやらねば、本当に流されてしまうだろう。

以前、読んだ何かの本の中に「その時その場を生きよ」という言葉があった。過去を悔やまず、未来を憂えず、今やっていることに専念すればよい。そうすれば必ず未来は良い方向に動いて行くだろうということである。いつまでもくよくよ考えてもしかたがない。

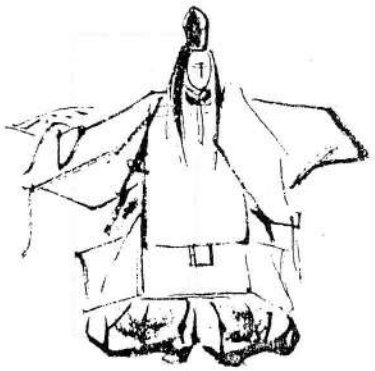
とにかく行動あるのみである。たとえそれが失敗に終わったとしても、それはそれでしかたがない。何もしないよりはましである。とにかくこれから一年間は、この考えでやっていこうと思っている。

これから一年間はクラブのことに追いまわされるだろう。しかし正直な気持ちとしては、この一年間、クラブしかやらなかったということにはなりたくない。つまり、クラブにしばられることは避けたい。クラブのみに没頭すれば何か得られるものがあるかもしれない。しかし、それによって失うものも多いと考えるからである。

とにかく、これから一年、風韻会という重荷を支えきれず、つぶれてしまうこともあるだろう。そんな時には、助け起こして叱咤激励してほしい。

以上、何か支離滅裂な文章ですが現在の心境です。

最後に、みなさんには、いろいろお世話をかけると思いますが、よろしくお願いします。



写真撮影スタジオ

証明書写真

出張証明写真

サクライ写真館

阪神御影駅北100m　TEL (078)851-2739

昭和五十六年度行事予定

2月27日～3月5日	春合宿
3月8日（日）	慰労ハイキング
14日（土）	歓送謡会
4月～5月	新入生勧誘月間
5月3日～5日	旧三商大合同発表会
中旬	新入生歓迎ハイキング
	ジュニア合宿
6月上旬	新入生歓迎コンパ
中旬	学連春季発表会
7月5日（日）	四大学合同発表会
8月上旬	夏合宿
10月中旬	学連秋季発表会
11月21日（土）	自演会
12月19日（土）	クリスマスコンパ

ＯＢ通信

青木又雄氏（特別会員）
自ら謡うと共に観能を楽しむこと六十年。

倉繁謙吉氏（旧十九回生）
二十数年も謡いから遠ざかっており、皆様にもご無礼しておりますが、御活躍を祈り申し上げます。

加藤康之氏（新十四回生）
度々の各種会合への御案内を頂きながら、欠席ばかりで大変申し訳ありません。会員諸氏の益々のご健勝と会のご発展を祈念します。

今宿純男氏（新十八回生）
いつもいつも、御案内状等お送りいただいて、恐縮しております。風韻会での体験を生かして、現在、必修クラブで高校生に謡いを教えております。

川邊利招氏（新十九回生）
いつも御案内をいただきありがとうございます。三年前より、自動販売機営業部に属しております。

中川憲一氏（新二十二回生）
遠方の為、発表会に行けず残念です。今後、益々、風韻会が発展することを期待しております。

三崎典子さん（新二十二回生）
信じられないほど太かった大学時代がなつかしいほど、今は信じられないほど細くなり、三才の子のお母ちゃん兼先生として、がんばっています。大学時代がなつかしいです。

小島政章氏（新二十二回生）
今年七月に転勤になり、毎日慣れない東京で頑張っています。二年後には大阪に帰れる予定です。

戸田真弘氏（新二十八回生）
暇ができたら、またひょっこり部室に行くかもしれん。その時はよろしく。みんな練習頑張れよ！

たくさんのお便り、ありがとうございました。これからも、近況、御意見等ありましたら、どしどしお寄せ下さい。お待ちしております。

（学生一同）

伝　言　板

昭和五十五年

三月　長永恭子さん（旧姓田中・二十五回生）
御結婚！

八月　遠藤隆氏（二十七回生）飯田寿子さん
（二十六回生）御結婚！

九月　大西章博氏（二十七回生）樽本玲子さん
（二十七回生）御結婚！

十二月長永恭子さん　女児　御出産！

四年生進路決定！

嶋畑佳久　丸紅
反田雅之　旭化成工業
古沢　智　大学院
佐野邦子　株式会社サミット
田中邦子　福徳相互銀行

みなさん　おめでとうございます！

マージャン
六甲すずめ荘
神戸市灘区森後２－３
電話（078）841－9532

文具・事務用品・コピー
文具のスズヤ六甲店
国鉄六甲道メイン六甲ビル２階
TEL（078）821－6606

登録商標
御菓子司
常盤堂
神戸市東灘区御影中町
電話神戸(851) 4677番

御集会、コンパ、宿泊にどうぞ
六甲パーラー
六甲団地西
TEL 861－6890

編集後記

「風韻」二十一号をお届けします。発行に際しまして、原稿をお寄せ下さいました皆様方に深く御礼申し上げます。

なお、毎号掲載しております名簿変更通知は、新しい会員名簿の作成と重なりましたため、今回は省略させていただきました。

「風韻」の編集をはじめる当初は、あれこれと新しい企画を考えたりしたのですが、結局どれも計画倒れに終ってしまいました。ただ、学生のページについては〃みんなで作る風韻〃をモットーに部員全員に参加してもらうことにしました。実際、みんなで作れたかどうかは、かなり疑問ですが、これを機会に各自が自分とクラブとのつながりを改めて考えてくれたらと思います。

編集委員
佐野邦子
田中邦子
反田雅之
嶋畑佳久
古沢　智

昭和56年 5月 6日 印刷
昭和56年 5月 9日 発行
発行所 神戸大学風韻会
神戸市灘区六甲台町
印刷所 みなと出版印刷株式会社
神戸市灘区浜田町2丁目5の3
電話 821－8331(代)

雑誌からコピー印刷まで……
みなと出版印刷(株)
神戸市灘区浜田町2丁目5の3
阪神新在家高架下12－11号
TEL. (078)821－8331(代)

大衆酒場
宴会場完備
ぜい六
学生さん歓迎
ビール1本 330円・お酒1本 230円
市バス六甲口南 TEL (851) 4787

古書買受・事務用品
(御報 参上)
小牧文具書店
神戸市東灘区御影本町2丁目15－25
電話 851－3286